
守護者の誓い ― 漆黒の捕食者 ―

深山 姫鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護者の誓い — 漆黒の捕食者 —

【Nコード】

N3508V

【作者名】

深山 姫鈴

【あらすじ】

茜色に染まる空の下。学校から帰宅する信也の前に現れた、黒い翼を持つ人物。人気のない交差点で殺されそうになった信也を救ったのは、とある私立高校に通う少女と彼女に誓いを立てた女性であった。

少女に問われた言葉。その答えを出した信也は、彼女達が所属する組織へ入団することに。

——現代ファンタジー「守護者の誓い」シリーズ第一段、ここに登場！

『毎日同じような生活をしていると、いまひとつ物足りなさを感じてしまう』

と思う者が、一体、この世にどのくらい存在するのだろうか。

これは、とある高校に通う男子生徒が、不思議な力を持つ少女たちと出会う直前まで感じていた疑問である。

しかし、彼はそんな彼女たちと出会い、いつしか、その心は――

茜色に染まる空の下。学校指定の制服を着る少年は、都心を少し外れた小さな交差点に差し掛かるうとしていた。

耳には使い慣れたイヤホンがつけてあり、そこからは何処か切ない歌詞とメロディが流れる。

彼の名前は、北原信也^{きたはのいしや}。家から徒歩五分くらいの所にある私立校である銀蘭高校^{ぎんらん}に通う男子生徒だ。

成績はいつも上の下。運動は少し苦手であるが、普通に生活のするであれば、なんら問題はない。

今日で信也が高校に入学して早三ヶ月と半月が立つ。明日からは、高校生活で初めての夏休みに入る。

この一学期を通してわかった事は、信也は自分のクラスにあまり馴染めていないこと。そして、友人は片手で数える程度しかない。後者の方は、ちゃんと理由がある。信也は昔から他人と接することが得意でない。その上、自分から声をかけることに抵抗を感じてしまう。故に、今日もまた一人で教室に残って二時間くらいの勉強をしてから、帰宅しているのだ。

これは、さる理由で二年前からずっと続けている。そのため、彼

の中では日課になっている。

見慣れた景色を眺めながら、信也は脇にある横断歩道に近づき足を止める。一度、彼は向かいの信号機に視線をやる。

そこには、横断を禁止する赤色の灯火が点灯している。と同時に、彼が聞いていた曲も終わってしまう。

信也はイヤホンを外し音楽機器の電源を落とした。その後、片手に持っている学生鞆の中になおす。

最初の異変に気がついたのは、その直後だった。目の前の信号が赤から青に変わり、斜め後方に停止した大型トラックが動き出す。それが、彼の目の前を通り過ぎようとした時である。

信也と横断歩道を挟んだ向かい側の空間が歪み、そこから黒い霧のようなものが溢れ出す。何の前触れもなしに。

それに目を見張るのも束の間。彼が横断しない、と判断したトラックが彼の前を横切る。どうやら、その運転手は、信也の見る光景に全く気付かないようだ。

彼の視界がトラックの車体に遮られている間に、例の霧は完全に掃われた。その代わりに、彼の視線の先には、誰もが目を見張るものが確かに存在した。

背中に生えた黒き翼に漆黒の髪。それらと、ほぼ同色の胸当てと腰巻をした筋肉質な巨体。その片手には、切れ味の良さそうな一振りの斧が握られていた。

その姿を目の当たりにした時、信也の背筋を何かゾクツとしたものが走る。彼はすぐさま自分以外に人がいるか周囲を見渡す。が、辺りには信也以外の人はいない。また新たにやってくる人も皆無である。

今この場にいるのは、彼一人のみ。

信也は思わず逃げ去りたい衝動に駆られる。しかし、体は言うことを聞いてくれず、動くこともままならない。

おそらく先にいる者を見て、無意識の内に体が硬直状態に陥ってしまったのだろう。

心の中にあるのは、ある種の焦りと相手に対する大きな恐怖のみ。刹那、その人は動いた。信也の視界から一瞬で姿を消したかと思えば、その巨体はもう彼の目の前にあるのだ。そして、彼はなんの感情も宿らない表情で彼を見下ろしている。

——逃げなきゃ……。

信也がそう思った時、左手首に強い圧迫感を覚えた。途端に、目の前の巨体がどんどん離れていく。

握られた手に目を向けると、肌の白い手の甲と制服らしき袖部分が見えた。

そのまま上へ視線を移せば、肩甲骨辺りまで伸ばした栗色の髪を持つ女性が先導を切っている。

「……君は、一体……」

「馬鹿！　なんであんな所で、突っ立っていたのよっ！　あんた、あいつが何者なのか、わかっていないでしょっ！　そんなに死にたいわけ！？」

彼が最後まで言わぬうちに、見知らぬ少女は振り向き、叱責に近い口調で言い飛ばされてしまう。

——死ぬなんて、冗談じゃない！

そう彼女に抗議しようと思っても信也が口を開けば、後ろの方からけたまし咆哮が聞こえた。

ビクンツと信也は体を強張らせて再びあの巨体を見る。と、そいつは凄まじい速さでこちらに近づいているではないか。その速度は、世界最速と言われる哺乳類のスピードを優に超えている。

「余所見する暇あるなら、前見て走る！」

依然として、全速力で走る少女から信也は注意を受けた。

手を引かれて駆ける信也は、前に向き直ると、彼女の言うとおり走り続ける。

——と、ここでまた一人。紫色の髪を長く伸ばした黒いスーツ姿の女性が、彼らの視線の先に立っていた。その人と擦れ違う際、前を走る少女は彼女に静かに言葉を発する。

「あとはまかせたわよ」

「……はっ！」

スーツ姿の女性は軽く低頭して相槌を打つと、そのまま信也たちを自身の後方にやる。そして、手中に二振りの剣を出現させた。そのまま、それらを振り上げた。瞬間、迫りくる敵に向かって最大限の力で日本の剣を振り下ろす。

見知らぬ少女に連れてこられたのは、二人掛けのベンチが一つとブランコしかない小さな公園だった。時刻が六時をまわるといふこともあり、そこにいるのは彼らの二人しかない。

これからこの場所で遊ぼう、と言いだす者はいないだろう。おそらく。

先ほどと違う点を挙げれば、時節、買い物帰りの主婦や仕事を終えたサラリーマンが、彼らのいる公園前を通り過ぎるくらいか。

そんなことはお構いなしに、信也はおぼつかない足取りでブランコの傍らに佇む粗末なベンチに腰を下す。途端に、疲弊した体から疲れが抜けていくような感覚が広がる。

自身の背を預けたベンチの背もたれは、記憶にある物より堅く感じられた。

そのままの状態で見上げた夕暮れ空には、一番星やら二番星などの星が姿を現している。東の方は、夜の帳が少しずつ範囲を広げつつあった。

——こんな風に見上げたのは、いつ振りだろう。

夜空に近い夕暮れの空を眺めて、信也はそう感じた。

普段は、こんな風に空を見上げたりはしない。だが、これは自分が不幸な事件（？）に巻き込まれたせいなのだろうか。それに、異質な人物に殺されそうになった時の感情は、今でも心にしぶとく残っている。

あの正体は、一体何なのだろう。なぜ、俺を狙ったのか。この俺に、どういった関係があるのか。

冷静に考えれば、不可解に思う疑問が信也の脳裏に浮かびあがる。

——こんな所で、一人で考えたって仕方がない。

そう思い、信也は大きく息を吸い肺に溜まった空気を吐き出す。と、聞き覚えのある声が自身の耳に届く。疲れているせいなのか、重たく感じる頭を上げて信也は正面を見る。と、そこには自身に飲料水の入ったペットボトルを差し出す、少女の姿があった。

「……あ、ありがとう……」

お礼を言った信也はそれを受け取る。早速、そのキャップを開けて中にあるものを一気に口に含む。と、からからに乾いていた喉が潤いを取り戻す。そして、火照っていた体も僅かにだが冷めたさを取り戻してくれる。

「ねえ、走っている途中で思ったけど。あの時、どうしてあんたは、すぐに逃げなかったの？ あれは、私たちのような人間を喰らって生きる奴なのよ？ あんなのに遭遇したら、すぐに逃げるくらいしきやだめよ」

そんな彼の様子を正面から見て、少女は呆れたような口調で言う。その後、自身もペットボトルのふたを開け、中にあるものを口にする。

それが当たり前の行為なのだ、と無言で主張していた。

「……む、無茶言っなよ！ 今の今まで、そんな奴と会ったことなかったのだから！ それに、あんなのがいきなり——」

「ちよ、ちよっと待って！」

襲ってきたら、誰だって足がすくむだろうっ、と抗議する途中で、彼女は慌てたようにそれを遮った。

どうやら、今の発言に問題があったらしい。

先ほどとは打って変わって、少女は驚いたように目を大きく見開いていた。目の前にいる信也の姿を映していた。

「もしかして、あんた——いや、違うわ。あの人から聞いた話だと、まだもう少し先だって言っていたし、それに……」

などと独り言に近い状態で彼女は信也に背を向け、ぶつぶつと呟きながら何かを考え始める。

——何かまずいことでも言ったのだろうか？

そんな疑問が脳裏を過る中、信也はその少女の行動を眺める。

ああじゃないこうじゃないと呟き、思考回路をフルに使う少女は必死に物事を整理していた。

そんな彼女たちの許に、また新たな人物が上空から音もなく公園の中心に舞い降りる。

あるじ
「主人！」

その人物は深く考え込む少女を目にすると声を上げ、すぐさまその許へ駆け寄る。

先ほど、少女と逃げる際に擦れ違った紫色の髪の女性だった。

「……あ、おかえりなさい。ねえ、聞いて！ あの子——」

見知らぬ少女は、近づいた彼女にさらに近寄る。

一度、少女は信也を一瞥してから小声で何かを彼女に囁きかける。時折、真剣な面持ちでコクコクと頷いていた彼女も、驚いたような声を漏らして彼を見る。そして、彼女も側にいる少女に向って控えめに言葉を発した。

十中八九、目の前にいる二人が知る信也の何かについて話し合っているのだろう。本人の耳に届かぬように。

時間にして二、三分くらいだろうか。話が長引くことを予想したのか、突如、少女は振り返った。そして、ベンチに座る信也を見て「ねえ、あんた。今日は、もう帰っていいよ」と告げられる。

時間が止まった気がした。

「……は？」

一瞬、その言葉に理解できず、信也は訳が分からないと言った表情で彼女を見る。

いつ話が終わるのだろうか、と思いながら緊張して待っていたのに、あっさりとした彼女の言葉に変な脱力感を覚えてしまう。つまり、拍子抜けしてしまったのである。

帰宅途中に異形の人物に遭遇し、なおかつそれと関わりがありそうな少女に助けられた。

せめて、なぜ自分が襲われたのかくらい教えてくれてもいいだろう。

と、信也は心の中で思っていた。しかし、それはもはや期待できそうにない。

信也は短くため息をつくとき、体に少し疲れの残らせたまま立ち上がる。それを見計らい、少女は信也に向かって再び口を開いた。

「本当は色々と聞きたいことや、教えたいことがあるけれど、今の状況だとどうしようもないわ。それに、ちゃんとした説明を聞きたいなら、『あの人』に直接会う方が一番いいのよね。だから――」

そう彼女は、悔しそうな申し訳なさそうな複雑な表情でそう告げた。

西の空にあつた太陽も、高い建物の向こうに暮れてしまった。

信也は薄暗い歩道を歩いて、住宅地にある一軒家の前で足を止める。そこには、「北原」という立て札が玄関扉の隣にかけてあつた。そこで立ち止まった信也は、そのまま家に入ろうとせず、先ほどの出来事を静かに思い出す。

公園で別れた少女の最後の言葉が、今もなお彼の脳裏にはつきりと残っていた。

『もしもあんたが、私たちやあんたを襲った奴の正体を知りたいなら、今週の土曜日——つまり明日の正午に、もう一度、この公園へ来て。そうしたら、あんたに『あの人』の元へ導いてあげる』

そう言われはしたものの、正直な所、どうすればいいのかわからない。というか、そう言つてしまえば、それで終わりのような気がするが。

「……はあ。これから、どうしよう……」

深い黒に堂々たる面持ちで姿を現す月を見上げ、信也は独白したつもりなのだが——

「それなら、家の中に入つて、ゆっくり考えてみたら？」

と、期待もしていなかった答えが優しい声音によつて返された。そのため、信也は大きく目を見開いて声のした方へ視線をやる。

そこには、七つ年上の姉である綾香あやかの姿があつた。腰辺りまで伸びた焦げ茶色の髪に、女性にしてはやや高めの身長をしていた。レディースのスーツを上手く着こなしている。片手は通勤時に使う革製の鞆がある。

「ただいま、姉さん。今日も残業？」

と、信也は家族にみせる穏やかな笑みで話しかける。

自分にとっては、肉親——特に、姉弟の場合——との会話やスキップは心休まる時だ。

「ええ、そうよ。新人はすることがいっぱいで大変よ。……信也も、そうでしょ？」

「うん。まあ、そんなところかな」

信也はそう答えた後、自身の瞳を瞼で覆い被せる。

数時間経った今でも、あの光景が鮮明に浮かび上がった。そのあり得ない出来事を彼女に告げるべきか、彼は悩んでいた。が、それを綾香に包み隠さず話した所で、その答えが彼の望む方向に向かうのかは、予想しなくとも確実にわかる。その答えは、否だ。

信也がそう思考を巡らせていれば、隣にいる綾香がクスツと笑い声を洩らした。

「大丈夫よ、信也。あなたは、自分だけが出来ないことをすればいいわ。例え、それがどんな結末になったとしてもね」

綾香はそう言い、信也と同じように肩を並べて夜空を見上げる。

「だから、あなたはあなたらしく。そして何より、自分が後悔しない生き方を選びなさい。そうすれば、あなたにもわかるはずよ。自分に何が出来て、何が出来ないのかが」

その時の信也は、すぐに姉の言葉が理解できなかった。

小首を傾げて信也は姉を見やると、桃色の口紅が塗られた唇が美しく弧を描き、弟の姿を捉えていた。まるで、彼の脳内に蘇ったあの光景を、自分も同じように体験したかのように。

「……あ！二人とも、そんな所で何やっているの？」

と、今度は玄関の方から活発なような声が聞こえた。その方へ信也たちは一斉に視線を向けた。その先には、まだあどけなさが残るが顔立ちと容姿の整った少女が、エプロン姿で立っていた。

彼女の名前を北原由香利きたはら ゆかりといい、信也の双子の妹だ。

現在、由香利は兄にあたる信也と同じ高校に通いながら、現役で

モデル業もしている。

そちらの方はかなり人気があるようで、姉の綾香曰く「外見が良
いせいなのか、特に中学や高校の女の子に、多く支持されているの
よねー」とのこと。

最近では、テレビ出演などが入ってきたりしているためか週に二、
三日ほど学校を休み、多い時でも一週間分の授業に出られない時
もある。

その時は、信也が授業時に各教科で板書したものをノートに取り、
由香利に解説を入れながら説明をする。そのための、放課後を使っ
て行っ彼の勉強なのだ。

「ただいま、由香利。ついさっき、姉さんとそこで会って、話をし
ていただけだよ」

玄関から出てきた彼女に近づいた信也は、笑顔で彼女に答える。

そして、同意の意味を込めて、信也は綾香に視線を向ける。

「ええ、そうよ。今日は珍しく、信也の帰りが遅かったからね」

「え？ お兄ちゃん。それ、ほんと？」

信也の言葉に、綾香は同意をする。と同時に、それに反応した由
香利は、兄との距離を詰める。そして、彼の胸元に片手を当て、そ
の顔を覗き込むように問いかけた。その表情には明らかに、心配と
申し訳なさが混ざっている。

「……だ、大丈夫だよ。由香利。いつもの勉強が、長引いただけだから」

由香利は、一日の大半（ファッション誌の撮影などを除く）を同い年の信也と共に過ごしている。さらに、彼女は家族の中でも一番年下だと言う事もあり、目上の人である彼らに心配をかけまいと努力しているのだ。特に、信也には勉強などを教えてもらっている分、余計に気を使っているのだろう。

それだけ由香利は、身内の中でも人一倍家族思いの強い少女なのである。

だからこそ、信也は僅かな嘘でもばれてしまうと思い、新たな言い訳を考えようとした。が、由香利は「良かった」と深く安堵した表情で声を洩らした。

そして、拳二つ分くらい高い兄を抱きしめ、信也の首筋に自身の顔をうずめる。それほど由香利は、彼を心から信頼し愛している証拠なのだろう、とつくづく思われる。

「良かったわねー、信也。由香利に好かれて」

姉にそう言われた直後、二人は頬を朱に染めて慌てて離れる。そのまま勢いよく彼女の方に顔を向ける。そこには、綾香のいたずら的な笑みがあつた。

「ちよつと、お姉ちゃん。からかわないでよ！ 別に、お兄ちゃんとそういう関係じゃないから！」

「そつだよ、姉さん。変なこと言わないで！」

信也と由香利は、すぐに綾香に反論する。

「ふふつ、冗談よ。さ、早く由香利が作ってくれた晩御飯、食べましょー！」

といい、彼らの背を軽く押しやりながら彼女たちは家の中に入る。やっと家の中に入った信也と綾香は二階にある自室に戻って私服

に着替え、一階にあるリビングに向かう。最初に彼らの視界に飛び込んできたのは、部屋のほぼ中央に置かれたテーブルには作りたて料理だ。

そこからは、出来たての晩ご飯であることを示し、もくもくと湯気がたっている。今日の夕食は、由香利の得意料理の一つであるだし巻き卵と肉じゃが、そして白みそを使ったみそ汁である。

信也たちの母は、遠く離れた場所で単身赴任をする父と共に付いて行った。その事もあって、料理上手な母は前もって信也たちに料理を教えていたのだ。

それは彼らの家の近所に住む人々にまで知れ渡り、時節、作りすぎた物をお裾分けする時がある。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。学校とお仕事、お疲れ様。今日は、私の作った料理を召し上げれ！」

と満面の笑みで由香利は言い、リビングに入ってきた兄と姉を迎え入れた。

「わぁ、美味しそうだね！　ね？　信也」

「そうだね。由香利、今日は作ってくれて、ありがとう」

「どういたしまして。冷めないうちに早く食べよ」

無邪気に喜ぶ姉を信也と由香利は微笑ましそうに見やり、それぞれ席に着く。

食事を終えた三人は、自分たちの役柄を決めて家事を行っていた。信也と由香利は、台所で食器洗いとそれを拭く係。綾香は、風呂を洗う係だ。

「二人とも。今、お風呂にお湯入れたからね」

「……ありがとう。姉さん」

信也は台所の出入り口から顔を出し、リビングから声をかけた彼女に返事をする。

時刻は、ちょうど夜の八時を回ったところだ。このあと、先にお風呂へ入らせてもらう予定だ。

その後、由香利に学校で行った授業のノートを見せて解説を入れなければならぬ。

「ごめんね、お兄ちゃん。色々と、迷惑かけて」

「謝らなくていいよ、由香利。もう慣れたから」

隣で申し訳なさそうに謝る由香利に、信也は澄んだ笑顔を見せて答える。それから、洗い終えた食器を彼女に手渡す。

「ありがとう、お兄ちゃん」

そうお礼を言った後、何か思い出したのか由香利は「あ、そういえば」と声を上げる。

「ねえ、お兄ちゃん。知ってる？ 今日、マネージャーさんから聞いた話なんだけど、最近、この辺りで人が襲われたり、建物の一部が破損したりする事件が多いんだって」

由香利は皿を拭く手を止め、そんな話題を隣にいる兄に投げた。

その言葉に、信也は異質な人物の姿が脳裏を過り、思わず体を強張らせる。

「……へ、へえー。そうなんだ。なんか、物騒だね」

と、由香利に不自然に思われないように信也は、彼女に笑ってごまかそうとする。が、きっとその笑顔は引きつった笑顔になっているに違いない。

それを証明するかのように、由香利は訝しそうに目を細めて兄を見つめる。

「どうした？ 由香利」

信也がそう問いかけた直後、彼女はクスツと静かに笑い声を洩らす。

「何でもないよ、お兄ちゃん」

という答えが返ってきた。

信也が風呂に入り、自室に戻ってきたのは九時を回った頃である。彼は勉強机に向かうと、その上に置いてあるエアコンのリモコンを手に取り、電源ボタンを押す。すると、ピーツという機械的な音が本体から鳴り、静かな稼働音と共に冷たい風が吹き始めた。

その後、学生鞆の中から今日の授業で使った教科書やノートを取る。それらを置いた後、帰宅途中に起きたあの光景を思い出す。

——あれは、一体、何だったのだろうか？

そんな疑問が彼の脳裏を掠めた時、背後にある扉を軽くノックする音が聞こえた。

「……お兄ちゃん、私。入っていい？」

という由香利の声が、外を見ていた信也の耳に届く。

すぐに信也は彼女に入室の許可を出すと、パジャマ姿の妹が扉を開けて入ってくる。その手には、数冊のノートが握られていた。

「お兄ちゃん。いつもごめんね。勉強、教えてくれて」

由香利は、信也の前まで来ると申し訳なさそうに言う。

「謝らなくていいって。さっきもそう言っただろ？」

「……うん。だけど私、お兄ちゃんに勉強とか教えてもらってばかりで、何もお礼が出来てないから……」

そう言った信也に、由香利は申し訳なさそうな表情をさらに酷くさせて言葉を発する。

「そんなに気にするなよ、由香利。お前は、俺の自慢の妹なんだから」

信也は、お風呂上がりの由香利の湿った髪に手を当て、梳くようにさっと一撫でした。

「ありがとっ、お兄ちゃん」

由香利は兄に頭を撫でられ、穏やかな顔つきで口元を綻ばせる。

直後、彼女は何かを感じたのか、はっとした表情で開け放たれた小窓に視線を向けた。

「由香利？」

「お兄ちゃん、危ない！」

その行為に彼が問いかける間もなく、由香利は自身の持ち物を手放し、兄を両手で前へ押しやる。

彼女もそれに便乗して、後ろに倒れる信也の胸に飛び込む。刹那、ガラスと小窓周辺の壁が破壊される音が辺りに響く。

「……ゆ、由香利。なんだよ、急に……っ！」

どうしたんだ？ と、信也は半身を起し、彼女に問いかけようとする。が、皆まで言わぬ内に、視線を机のある方に向けた。刹那、彼は言葉を失い、全身を硬直させた。

視線の先には、彼が学校から家に帰る際に襲われた、漆黒の翼と一振りの斧を持つ巨体の彼がいるのだ。

その体には、ガラスや壁の破片が所々に付着していた。その様子を見た限り、彼は人並み以上の筋力を発揮して壁を壊したのが窺える。

——なんで、こいつがここにっ！

そう思い、信也は焦りの色を浮かべて、隣で横たわる由香利を見る。

しかし、彼女は苦しそうに目を閉じたまま目を覚まさない。信也は彼女の肩に手を伸ばし、ゆすり起こそうとする。

「その子を起こそうとしても、無駄だよ」

静まり返った彼の部屋で突如、何の感情も籠らない男性の声が聞こえてくる。

困惑した表情で信也は、巨体の方へ視線を移す。と、信也の知らない間に彼の隣に細身でやや長身の男性が立っていた。

さらに、その男性は信也たちをあざ笑うような表情で立っている。

「……どういう、意味だ？」

恐怖心と警戒心が完全に拭えないこの状況で、信也は長身の男性に問いかけた。

「簡単な事だよ。今、ここら一帯は僕のゾーファが張った結界の中。普通の人間が結界の中にいれば、意識を失わせることができる。もちろん、跡形なく消し去ることもね」

自身に身構える信也に向かって、彼は口の端を吊り上げて告げる。すると、ゾーファと呼ばれた巨体が、ゆっくりと迫ってきた。

——由香利を連れて、逃げなきゃ……。

そう思う信也のだが、またもや迫りくる敵に恐怖し動けなくなっていた。相手は、着々と自分たちの方に近づく。

殺される、という恐怖心が徐々に大きくなる中、信也の視界に影が差した。

目の前には、すでにゾーファがそびえ立っている。

彼が持つ一振りの斧が、音もなく持ちあがる。信也の耳には、うるさいほどに心臓が脈打っているのがわかった。

彼は持ちあげた斧を頭上まで上げると一度動きを止め、重力に任せて大きく振り下ろす。

信也は由香利を庇うよう敵に背を向け、彼女の体を自分の許へ引き寄せた。そして、彼はぎゅっと目を閉じて敵の攻撃に備える。

「まったく。今日は、もう現れないだろうと思ったら、いつもこうなんだから」

と、聞き覚えのある声が信也の背後で聞こえた。刹那、金属同士がぶつかり合い、軽い振動が起こる。

はっとした表情で信也が目を開け、驚きを隠せない顔つきで後ろを向く。

そこには、夕方に襲われた時に救ってくれた少女がいた。その前には、二振りの剣を交差させ、敵が振り下ろした斧を受け止める女性もいた。

「——君は、どうして俺のいる場所が……」

わかったんだ？ と信也は目の前にいる少女に聞こうとした。が、

すぐ隣で誰かが傍に寄った気配が感じられた。同時に、その人物の手が彼の両肩にそつと置かれる。信也は体を強張らせて、由香利がいる方とは反対側に視線を向ける。

そこには、群青色の半袖の学生服を着た、やや小柄な少女がいた。ショートカットの焦げ茶色の髪はきちつと手入れが施され、甘い香りを漂わせる。その視線は鋭く、真っ直ぐとゾーファの後方に立つ男性に向けられていた。

「なんで貴様らがここにいるんだ！？ 移動や結界の発動時の気配は、完璧に消したはずなのにっ！」

巨体の主らしき人物は叫ぶようにして、信也の前にいる少女に向かってに言う。

どうやら、彼女たちの出現は予想の範疇に入っていなかったようにみえる。

彼のわななきぶりに目の前の少女は、やれやれと気だるげなため息をもらした。そして、

「わかるに決まってるでしょっ。あんたね、結界の中に私たちが引き込んでおいて、良くそんなことが言えるわね！ しかも、あんなに派手な音を近くで聞かされたら、嫌でもあんたの目の前に現れるしかないじゃない！」

と、彼女は腰に両手をあて叱責の言葉を相手に浴びせる。おかげで余計な体力を使うはめになったじゃない、と小声で文句を言っていた。

やがて、ある程度文句を言い終えたあと、すぐに彼女は信也の方に視線を向けた。それから、苦笑しながら口を開ける。

「あんた、今日は色々とごめんね。私の方も。今日は、もう会わないだろうって思ってたわ。あいつらを追っ払ったら、壊した物はすぐに直すから、もう少しだけそこで大人しくしていてね」

そう謝罪すると信也の返事も待たずに、今度はもう一人の女性に視線を移す。

彼女は二振りの剣で相手の武器を止めたまま、静かに次の指示を

待っている。

少女は小さく深呼吸すると、朗々とした態度で言葉を発した。

「さあ、もう一仕事と行きましょう！」

と声を掛けられた女性は彼女の言葉に相槌を打てば、武器を持つ手に力を込めて防いだ斧をはじき返す。

そのまま間、髪を入れずに彼女は相手の懐へもぐり込み、斬りかかりに行く。それに合わせて、巨体も後方へ下がって斧を構えなおしたその時だった。

壊された部屋の壁から何者かが入り込むと同時に、剣を交えようとした二人の動きも止まった。

彼らの間には、黒衣を着た人物がいた。その手元を見れば、同色の鉤爪を装備し、それで両者の武器を押さえていた。

「……双方、武器を引け。さもないと、この場にいる者、全員を殺す」

と、地獄の底から剥いでるような低い声が聞こえた。

信也を隣にいる少女は、さっと彼を庇うように移動する。彼女は、新たに入ってきた人物を警戒しているのだ。

それは彼女たちも同様らしい。

「下がって」

「……くつ。お前もだ」

と、武器を交えようとした二人に指示を出す。同時に両者は、それぞれの武器を構えたまま数歩後退する。

二つの武器が引いた所で、謎の人物は少女たちの方を一瞥すると、すぐに背を向けた。

その先には、巨体と悔しそうに自身の唇を噛む長身の彼がいる。

「貴様。俺の命令を無視して、こんな所にいるとは、どういっつもりだ？」

先ほどの低い声音に鋭さが増し、長身の彼に襲いかかった。

「お、俺はただ、そいつの後ろにいる奴を殺したかったんだ。夕方、帰宅途中のそいつを見つけて、こいつに殺すよう命令したんだ！」

長身の彼は信也のいる方を指さし、そう告げる。

が、相手がその言葉を信用していないようで「本当だって、信じてくれよ」と嘆いた。

すると、もうその言葉は聞きあきたのか、謎の人物は先ほど自分が入ってきた場所に歩み寄る。

「……だからと言って、命令違反の罪は少しも消えぬぞ。戻ったら、俺と主の罰を受けてもらうぞ」

そう言うのと、謎の人物はもう一度、信也たちを一瞥してから、開いた壁から外へ出た。長身の彼も、悔しさと苛立ちの混ざった表情で巨体と共にその後を追いかけた。

途端に張りつめていた緊張が解け、信也は体の力を抜いて息を吐く。自身の隣でぐったりしていた由香利の方からは、規則正しい息遣いが聞こえてくる。

「……はあ。一時的な戦闘だけど、ご苦勞様。あとは、あいつが壊してくれた場所、修復してくれる？」

「承知」

と、彼女たちが新たに作業を始める間、信也は隣で気を失う由香利を抱きあげて、その体をベッドに寝かせた。

先ほどと変わっているのは、苦しそうな表情が穏やかな顔つきになっっていることだけ。

信也は彼女の名前を小声で呼び、静かに眠る由香利の手を握った。彼女は信也の大切な家族であり、唯一無二の存在でもある妹だ。

だから、絶大な信頼と愛情を受ける自分も、由香利ほどではないが彼女に対する特別な思いがある。

「あの、心配しなくても、大丈夫、ですよ？」

信也の傍らで守っていた少女は彼の隣に正座すると、その手に自分の手を添えて告げた。

「……え？」

信也は顔を上げると、隣の彼女に視線を向けて聞き返す。

「……えっと、わずかに、ですが、彼女にも、私たちの、け、結界に対する耐性が、あるみたい、です。命に、べ、別状は、ありませんので、安心、してください……」

聞き返されるとは思わなかったのか、彼女は言葉につつかえながらも答える。

彼女が握る手に、ほんの少しだけ力が籠った。

彼女は彼女なりに、信也を心配してくれたわけか。

「ありがとう、心配してくれて」

信也は添えられていない方の手を彼女の頭上に置き、その髪を梳くようにして撫でてやる。由香利にしていると、同じくらいに。

「……え、あ、い、いえつ。こ、こちらこそ、あ、ありがとう、ございます」

すぐに彼女は頬を朱に染めて顔を俯かせると、か細い声でお礼を述べる。が、しばらくして彼女が顔を上げると、小さく口元を綻ばせて気持ちよさそうな表情があつた。

人見知りをする性格とは裏腹に、意外と感情が表に出やすい子なのかもしれない。

「あら、珍しい事もあるのね」

聞き覚えのある声が近くで聞こえ、その方に信也たちは顔を向ける。

そこには、薄手のベストにあるポケットに手を入れた少女と、その背後に黒いスーツを着た女性がいた。

「……っ！ え、えっと、あの、これは、その……」

と、信也に頭を撫でられていた少女は、彼女たちを見ると体を硬直させる。そして視線をさ迷わせながら、弁解しようと該当する言葉を脳内から探し出す。

「大丈夫よ。別に、怒ったりするわけじゃないから」

その様子を見かねた少女はクスツと短く笑い、彼女に向かって安心させる言葉を掛けてやった。

すると、その少女は体の緊張を解いて「はい」と返事をする。直後、彼女は頭上にある信也の手を優しい手つきで握り、自身の胸元辺りまでそつと降ろす。

「あの、さつきは本当に、ありがとうございました」

と少女はお礼を述べ、正座のまま深々と頭を垂れた。

正直、そこまでされるとは思わなかったから戸惑った。

「こちらこそ、助けてくれてありがとう……えっと」

彼女につられて、信也も頭を下げてお礼を述べる。

が、彼女たちの事をどう呼べばいいか、信也が思考を巡らせていると、誰かの手が肩に置かれる。

信也が顔を持ちあげると少女と視線が合い、彼女は残念そうに首を横に振った。

「……悪いけど、今の段階で私たちの自己紹介は出来ないわ」

「どつという意味？」

彼女の言葉を理解できなかった信也は、小首を傾げてその理由を求める。と、予想通りの反応だというように、彼女は目を閉じて長く息を吐く。

「規則、だからよ」

「規則？」

「ええ。私たちには、さつきみたいな事に関しての情報や知識——果ては身分を特定する情報なんかを、世間や一般人に口外してはならないっていう決まりがあるのよ」

今のあんただって、一般人となんの変りないわ、と続けて彼女は

答える。

「だから、君たちの名前もあの化け物みたいなやつのも、何一つ教えられないってこと？」

そう問いかけた信也の言葉に、彼女はしっかりと頷いてみせた。そう言われてしまえば、今の信也には何も言う事が出来なかった。

「だから私は、あんたに言ったじゃない。もしあんたが、私たちやさっきの奴らの正体を知りたいのなら、明日の正午に、あの公園へ来てって」

そうだ。確かにあの時、彼女は公園で別れる時に言っていた。

思わぬ出来事に動揺していて、その事が信也の記憶から一時的に忘れ去られていた。

「で。急かすようで悪いけど、結局、あんたは、どうするの？ 奴らの事もろくに知らずに、ただ死んでいくか。それとも、私たちと言う存在を知った上で、奴らに対抗する術を得るのか。……どうするの？」

真剣な面持ちで信也を見据えた彼女は、二つの選択肢を持ちかける。他の二人も同じように、信也の方に視線を向ける。その中で、彼の傍にいた少女は心配そうな顔をしていた。少なくとも、彼女だけは信也の事を気にかけてくれているようだ。

信也は一度目を閉じて、動揺した気持ちを落ち着けようと深呼吸をする。

確かに彼女の言うとおり、このままいつもの生活を送っても、すぐに奴らが動き出すだろう。そして、再び信也の前に現れ、自身は何の抵抗も出来ずに殺される。下手をすると、信也の家族や友たちなどの人の命も危ぶまれる。

それだけは絶対に避けたいのは事実である。だが、今の自分に彼らを守るだけの力はあるのか。その答えは、否である。その為には、自分には何が必要なのか。

そう考えた信也は下に向けていた視線を上げ、命の恩人でもある少女を真っ直ぐ見て口を開ける。

「――俺は……」

信也は、彼女に向って自分の決意を言葉にする。

彼女はそれを聞き届けたあと、彼の傍にいてくれた少女とスーツ姿の女性を連れて家を出ていった。

部屋には、信也とベッドで横たわる由香利だけが残った。

これから、新たな生活が始まる。そしてそれは、もう後戻りできない事実の幕開けでもある。

眩しいくらいの朝日が、勉強机の上にある小窓から差し込む頃。信也はベッドの中で目を覚ました。身体に昨日の疲れを残しつつ、大きな欠伸をする。と、横から柔らかい視線を感じる。

信也がそちらの方に視線を向けると、優しい笑みで兄の顔を見る由香利の姿があった。

「おはよ、お兄ちゃん」

と、信也に抱きつくような体勢を取っていた由香利は、嬉しそうに挨拶をする。その表情には、昨晚の苦しそうな表情はない。

「おはよう、由香利。昨日は、良く眠れた？」

わずかな眠気を残して、信也は彼女と同じように挨拶をする。その後、そんな質問を妹に投げかけ、心配そうに彼女の頬をそつと撫でる。

「クスッ。心配してくれてありがとう、お兄ちゃん。大丈夫よ。私は、ちゃんと眠れたわ」

由香利は短く笑うと、気持ちよさそうに目を細めながら答えた。昨日、二度にわたって信也は黒い翼を持つ巨体に襲われた。その時に、見知らぬ少女二人と女性に信也は命を救われる。

昨晚、少女の問いかけに答えた信也は、彼女を含めた三人を家から送り出した。その後、信也は意識を取り戻した由香利と共に一時間くらい勉強を行い、一緒にベッドで眠りに就いたのである。

昨日の出来事を思い出し、信也は黙り込んでいると、心配そうに顔を覗き込む由香利と目が合った。

「どうした？ 由香利」

妹の頬をさつと一撫でして、信也はそう問いかける。

「……なんか、ぼーっとしてたから。ねえ、お兄ちゃん。もしかして、昨日の夜、私が気を失っていた間に、何か嫌な事があった？」

由香利は、不安げに小首を傾げて大好きな兄を見た。その表情に

は、いつもの信也を心配するものがある。そして、自身に包み隠さず話してほしいという願望が含まれていた。

確かに、由香利が気を失っている間に信也は黒い翼を持った巨体の男に、再び命を狙われた。それを二度にわたって例の女性たちが助けてくれたのである。

しかし、それらの事を説明するのは容易だが、その話を信じるとなれば途端に難しくなる。

信也が返事に詰まっていると、自室の扉からノックの音が聞こえた。と同時に、その扉がゆっくりと開き、そこから姉がちょこんと顔を出す。

すぐに、綾香はベッドにいる二人がいる事に気がついた。

「……あ、二人とも、おはよう。さっき、朝ご飯出来たから、冷めない内に食べに来てね」

と終始笑顔で言い残し、綾香は扉を閉めて下の階へと降りて行く。しばらくの間、信也は姉が顔を出した場所を眺めていると――

「あつ。もうこんな時間！」

と、由香利は頭上にある目覚まし時計を見るなり、がばっと起き上がった。

「由香利？」

それに驚いた信也は身体をびくつかせ、訝しげに彼女を呼ぶ。

「ごめんね、お兄ちゃん。今日、十時過ぎからファッション誌の撮影があるの」

そう言うなり、由香利は慌てた様子でベッドから降り兄の部屋を出る。

部屋に残された信也は一人、ゆっくりと身体を起こした。そして、グツと上に向かって伸びをしてから自分の部屋を後にした。

リビングに向かうと、すでに由香利は食事を始めていた。その近くで、綾香は妹のコップにジュースを入れている。

「おはよ、姉さん」

「おはよう、信也」

と、綾香は由香利の隣に座った信也に笑顔で挨拶をする。

その後、彼女は由香利の前に飲み物の入ったコップを置き、急いで食べて喉を詰まらせないようにね、と軽く注意を促す。

今日の朝食は、食パンに目玉焼きとベーコンであり、それらの匂いが食欲をそそる。

「ありがとう、お姉ちゃん」

コクンと由香利は頷きながら、柔らかい笑みを浮かべてお礼を言う。そして、残り一口となったパンを口の中に放り込む。

そんなやり取りを一瞥した後、信也は目の前にある軽く焦げ目のついたパンをかじる。そして、いつものように信也はテレビで朝のニュース番組を見た。

画面に出されている映像を見て、信也は思わず顔を顰める。

「……あら、いつも信也たちが使っている道じゃない」

と、同じようにテレビに視線を向けた綾香は、意外だというような顔つきで言う。

それに驚いたように、由香利もテレビの方に顔を向ける。

今、信也たちが見ているニュースには、信也と由香利が学校へ行き帰りに使う交差点が、画面上に映し出されている。画面の下の方には「再び、謎の事故が発生」とある。

『昨日の夕方頃、柿木通りの交差点で、またもや原因不明の事故が発生いたしました。この事件による死者や怪我人は、ありません。しかし、建物や道路の一部に損壊が見られ、この通りに面する道路は、全て通行止めとなります。なお、警察庁への取材では、数日前より多発している事件との関係性が高いとして、調査を進める方針です』

そうアナウンサーが告げた後、今日の天気に関する情報に変わった。

しかし、綾香と由香利の二人は、さっきのニュースで動揺してい

るのか、視線を下に向けている。

「どうしよう。なんだか私、怖くなってきちゃった」

朝から重苦しい雰囲気になる中。最初に、そんな言葉を洩らしたのは由香利である。彼女は、先ほどのニュースを見て恐怖を感じているのだ。

「大丈夫だよ、由香利。俺がついてるから」

テレビから視線を外した信也は、妹の方に向いて優しい声音で言う。さらに、彼女が安心するように髪を梳くように撫でてやる。

「……うん、ありがとう。お兄ちゃん」

と、由香利は笑顔でお礼を述べる。が、そこには怯えのある表情が、薄く表れている。

食事を済ませた後も、信也は心細そうな表情で洗面所に向かう。由香利に付き添った。もちろん、彼女を不安にさせないためである。そのおかげもあってか、彼女は少し元気を取り戻してじくれたようだ。

そして、ちょうど九時をまわった頃。事務所から訪れた女性マネージャーが、妹を迎えに訪れた。と同時に、由香利は必要最低限の荷物を持って彼女と共に仕事場に出かけた。

「さて、私は自分の部屋で、仕事でもしよっかな」

「姉さん。休みの日くらい、体を休めたら？」

信也は、玄関に背を向けて体を上に伸ばす綾香に向かって、心配そうに問いかける。が、その言葉を聞くと同時に、綾香は信也の頬に両手を当てた。

「私は大丈夫よ。そういう信也は、どうなの？ 昨日、遅くまで由香利に勉強を教えていたけれど」

と言い、綾香は触れた信也の頬を撫でる。

温もりのある優しい感じがした。

「うん。俺も平気だよ、姉さん」

信也は思わず目を細めながら答え、綾香をギュツと抱きしめる。と同時に、タイミング良く玄関からインターホンが鳴る。

その音に驚き、信也は反射的に綾香から離れてしまう。

「……あ、お客さんみたい」

信也を抱きしめ返そうとした彼女は少し困った風に告げると、玄関近くにあるモニターまで移動し、それを見る。

「はい、北原ですが……どちら様ですか？」

綾香は、モニター下にある通話ボタンを押して応答する。

『私、折山と言います。北原君は、ご在宅でしょうか？』

と、モニターからは丁寧な言葉遣いの聞き慣れた声が聞こえてきた。

……確か、あの時俺を助けてくれた少女か。

と、信也は家に訪れた相手のことを思っている——

「ちよつと待つて。今から呼びに行くから」

その相手に綾香は答え、すぐに信也の方に顔を向けて口を開く。

「信也、あなたにお客さん。玄関先で待たせてあるから、行つてきなさい」

そう言うなり、綾香は一階奥にある自室へと歩いて行った。

信也が外に出ると、強い日差しと生温い空気が包み込んだ。

今朝の天気予報で見たが、今年の夏は猛暑らしい。どこもかしこも、三十度を優に超えているのだ。

姉の綾香曰く、信也が生まれてくるまでは、夏の日に気温が三十度を超す事なんて無かったと言う。

——全く、今日も暑いな……。

と内心で思いつつも、信也は少し離れた所にあるインターホンの方に視線をやる。

そこには、昨日の夕方、信也を助けてくれた栗色の髪の少女がいた。

「おはよう。さっき応答した人、あんたの母親？」

彼女は信也に向かって軽く挨拶をすると、さっそくと言わんばかりに、そんな質問を投げかけてくる。

「おはよう。さっきのは、姉さんだよ。母さんは、単身赴任中の父さんと一緒……って、そんな事じゃなくて、どうしたの？ 予定の時間とは、少し早いと思うけど？」

そう信也は答え、今しがた持った疑問を聞いてみた。

確か、昨日言っていた時間は、正午のはずだが。

「その件で、ちょっとね。昨日言った例の人なんだけど、少し前にあんたの事を話したら、どういう訳か、すぐにあんたに会いたいたって言いだしたの。それが、あんたの家に早く来た理由。分かってくれた？」

女性らしい胸の前で腕を組んで言うと、彼女は「一応、お昼もごちそうしてくれるって」と付け足した。

例の人って、どんな人なの？

そう信也は思ってしまうが、すぐに頭を切り替えて口を開く。

「理解はした。そうなったってことは、すぐに出かけるって事だよ
ね？」

「ええ、そうよ。とりあえず、ここで待つのも暑いし肌にも悪いから、玄関の所で待たせてもらうわね」

と言に残せば、彼女は信也の横を通り過ぎ、玄関扉に手を掛ける。そして、「お邪魔しまーす」と小さな声で言っただけに入っていた。そんな彼女を咎めることなく信也は、その後続く。そして、一人部屋に戻って出かける支度を始めた。

と言っても、ズボンをジャージから青のジーパンに履き替えただけである。

それを終えるなり、一階の自室にいる綾香に出かける趣旨を述べてから、玄関で待つ少女と共に外に出た。

玄関扉を開けると、今度は腰まである紫色の髪をした若い女性が立っていた。

「……あ、お疲れ様。首尾はどう?」

「問題ありません」

と、答える。

「そう。それなら良かった。辺りの様子を探る限り、あいつらの気配もないみたいだし、昨日みたいな心配はなさそうね」

「そのようでございます」

信也の後ろにいた少女は片手を上げるなり、彼女の方に近づいて会話を始める。

その光景を見ながら信也が彼女たちの方に近づくと、スーツ姿の彼女に睨むような目つきで見られた。

——何か、嫌われるような事でもしましたか?

と、信也は思えてしまう。

もちろん、当の本人はそんな事をした覚えは全くない。

「はいはい、そんな目でその子を睨まない。別に、あんたに嫌う事をしたわけじゃないでしょ?」

その言葉に頷いた彼女は、仕方ないと言わんばかりに信也から視線を外す。少しして、彼女は視線を彼に戻すと軽く頭を下げた。

これは謝罪の意味だろう、と信也は思いあまり気にしなかいでいた。が、それを見ていた少女の方は、困った風に肩をすくめて補いの言葉を入れる。

「あんた、ごめんね。別にこの子、あんたの事が嫌いで、あんな目つきをしたわけじゃないからね。一部、馴染みのない相手には警戒しろって指示出した、私の責任でもあるし」

と言いつつ、彼女は信也に背を向けてさつさと歩き始めた。

その後ろ姿を信也は少し眺めていると、横目にこちらを見る女性の視線に気がつく。

今度は何をされるのか、と思い信也は内心で身構えると――

「迷子にだけは、ならないでください。探すの、面倒ですから」

と、予想外の言葉を言われた。

その発言に、むっとした信也は「誰が、こんな所で迷子になるかっ」と言い返して足早にその後を追いかける。

彼女が言っていた「あの人」のいる場所に行くための道は、信也にとつてかなりややこしいものだった。

生れてから今まで、ずっとこの町に住んでいた信也だが、この行き方にはお手上げである。今なら、彼女が言っていた言葉に素直に頷ける。

で、現在使われている問題の道だが、ごく普通の生活を送る人は、確実に使わないであろう狭い廃れた道を通っている。

道幅は、やや小柄な大人が通るくらいでせいぜいだろ。ちなみに、彼らの両サイドは白いコンクリートの壁があり、太陽を完全に遮断している。そのため、もろに日差しを受けている時と比べて、涼しく感じる。

栗色の髪をした少女を先頭に目的に進む一行だが、会話が一つもない。ただ黙々と歩き続けるだけ。

他に信也が不用意に口を開くと、あまり好意的でない目で最後尾のスーツ姿の女性に睨まれる始末。正直、疲れるだけである。

――こんな事がいつまで続くんだろう？

という疑問が、本格的に脳内を支配しかけた時、狭い道が急に開けた。途端に、頭上にある太陽の光が視界を覆う。

それで目が眩んだ信也は、思わず腕を上げて目元に影を作った。そして、ぶれた焦点を合わせる。そのままの状態で、信也は正面を

見る。

そこには、少女と後ろにいたはずの女性が両サイドに立っていた。そして、彼女達に挟まれるようにして木製の扉があった。

「裏口からでごめんね。本当は、玄關口から入りたかったんだけど、今は旅行客がいっぱいで、忙しいから」

扉の右側に立つ少女は、片方の手を腰に当てながら言う。

その言葉を聞く限り、この扉は旅館の関係者が使う裏口の類か、と信也は簡単に予測を立てる。

いや、予測を立てる以前に、それ以外のものか思いつかない。

そう思いながら信也が黙っていると、少女は空いた方の手で隣にある扉を開ける。と同時に、その向こう側に古風的な日本の庭と建物が見え、顔を見せる。

「ようこそ。『^{ガイズ・マスター}守護者教団』日本支部へ」

信也がその景色を確認するなり、扉の左側に立つスーッ姿の女性が物静かかつ儼かな口調で言葉を発した。

衣擦れをたてて歩く旅館の人と、その後をついて行く宿泊客とすれ違いながら、信也たちは建物の奥へ進んでいく。

裏口から堂々としてきた時は、宿泊客に訝しい目つきで見られたが、それとは逆に従業員のの方は、にこやかな表情で会釈する。

その光景を目の当たりにした信也は、疑問だった彼女たちの正体を余計に知りたい衝動に駆られる。

「……あ、そうそう。ねえ、あんた。今からあの人に会っただけ、その時に何か聞かれたら、正直に答えてね？　そうしてくれないと、こつちも後で面倒な事になるから」

目の前を歩く少女は歩きながら、後ろにいる信也の方に視線を向けて忠告してくる。

その言葉に半ば頷きつつ、信也は最後の台詞に反応して昨晚の記憶を甦らせた。目に見えない不可視の恐怖が背筋に走り、身を震えさせた。

——あんな思い、二度とごめんだ！

そう思いながらも歩みを進めて行くと、前を歩く二人の足が止まる。その前には他の部屋と同様に襖がある。

いつの間にか周囲には人氣が失せ、静けさが漂っていた。

聞こえるのは、自分たちの息遣いと風の吹く音くらいである。そんな中、ゆっくりと目の前にいる少女が振り返る。

「さ、着いたわよ。さっきもいったけど、聞かれたことにはちゃんと正直に答えること。いいわね？」

「ああ。問題ない」

再度念を押された信也は、彼女に向かって大きく頷いて見せた。これから、自分は普通の人生から外れた道に行く。

それが、どんな事になるのか。今の信也には、全くとっていい程わからない。

けど、自分の出来ることをしよう。昨日の夜、姉である綾香が言ったように、自分が後悔しない道を選ぼう――そう思った。

「あかん。遅い、遅すぎるわ。こんなんやから、若いもんはかなわんねん」

と部屋に入ると同時に、奥で待ちくたびれたといった感じの声が聞こえて来た。

どうやら、この声の主が彼女たちの言う「あの人」なのだろう。

そんな人に向かつて、先導をきる少女は

「そういうあんたの方が、一番どうかしてるわ」

と言葉を返し、慣れた足取りで部屋の中へと足を踏み入れる。

「なんや、つれへんなあ。一応これでも、ちゃんと待つといたつもりやと思うねんけど？」

「ちゃんと待つてたなら、第一声に文句なんて言う訳ないでしょ。こつちだつて暑い中、あんたが言った通り、例の子を連れて来たんだから！」

おかげで私の予定が少し狂ったけど、と文句を言いながらも彼女は振り返り、信也を手招きする。

入り口で立ち止まった信也は、それに応じて彼女のもとまで歩み寄った。彼女の隣に立つと、「あの人」の姿を見ることができた。

黒のTEEシャツに同色のジーンズを穿いた男性だ。銀色の髪に、ややつり上がった目元に、狐の印象を思わせる人だった。

そんな彼は畳の上で胡坐をかいて、信也を見上げていた。

「ああ。これは、珍しい気の持ち主やね。これやつたら、あいつらに襲われんのもわかるわ。まあ、異例中の異例。いわば、敵に狙われにくい特異体質か。キミ、名前は？」

「北原信也です」

「信也君ね。わいは、^{かしはらひろむ}榎原輝彦言うねん。この娘^こらから少し聞いているかと思うけど、わいは、ここの仕切り役しとんねん。何かあったら、いつでもここに来るとええ。今、ここにいるもんは、全員歓迎するで」

そう輝彦は信也に言い、先ほどまで先導をきっていた少女に視線を向ける。と、彼女は軽く咳払いをしながら、信也に体をむけた。
「はいはい、自己紹介すればいいんですよ。えー、北原信也君……だっけ？ 私の名前は、^{きつうみか}如月美香。で、こっちはソフィール・イー^ル。よろしく」

と、美香は自己紹介をし、彼女の後ろに立つソフィールも軽く頭を下げて、それに応える。その中で、一つ気になったのが――

「如月^{きつう}って、あの如月^{きつう}デパートの？」

「ええ、そうよ。それがどうかした？」

美香は信也の言葉に同意すると、小首を傾げて問いかける。

その返事に、信也は少なからず驚いた。如月^{きつう}デパートは少しずつ全国展開を進めつつある企業である。その娘となると、そこそこ裕福な生活を送っていけるだろう。そんな人が、なんでこの町にいるんだろう、と不思議に思う。

という信也の疑問を察したのか、美香は困った風な顔つきをして手を後頭部にあてる。

「あー、そもそも私がこの場所にいるのは、たまたま行きたい私学がここにしかなかっただけよ。その都合で、母親とだけどこっちに移り住んだの」

分かってくれた？ とでも言うような表情で、美香はそう告げた。まあ、そういう理由であれば、わからなくもない。

とりあえず、同意の意味で信也は彼女の言葉にコクリと頷いた。

「さて、これで一通り自己紹介は終えたな。まあ、適当にそこら辺に座り。もう少ししたら、昼飯持ってきてくれることになってるから」

さらりと美香と信也の間に入ってきた輝彦は、そんなことを言つて後ろにある座布団を何枚か持つてくる。そして、信也達の足元に座布団を置いて行く。実に適当にだが。

「あ、ありがとうございます」

お礼を言つてから信也は眼下に敷かれた座布団に胡坐を組む。美香とソフィールも同様に、正座ではあるが座布団の上に座る。

それと同時に、廊下の方が慌ただしくなってきた。と言つても、誰かが信也達がいる部屋に向かって走つてくる音なのだが。

その音は、信也達が入ってきた開けっぱなしの襖の前で止まる。振り返つてそこを見た信也は思わず「あっ」と声をあげた。

新たにやってきたその人物は、昨晚、美香と共に信也の部屋にやつてきた黒い制服を着た少女である。

「お、遅くなりましたっ！」

片方の手を膝上に、もう片方の手を胸元に当てて荒く息をしながら彼女は、頭を下げてそう言葉を発する。

「べつに気にしてへんよ、志穂ちゃん。美香ちゃん達も、さつき着いたとこやし」

輝彦は彼女に向かつて軽く手をあげて言うと、志穂と呼ばれた彼女はがばつと顔を上げる。その瞬間に、彼女を見ていた信也と視線が合った。かと思えば、彼女の顔がもう彼の目の前にあつた。

「——あ、あの。昨日は、あ、あれから、どこか異常は、ありませんでしたか？」

志穂は信也の手を両手で握ると、上目遣いに彼を見て問いかけてくる。

彼女の頬が朱に染まっている。

それはともかく、自分の目の前で瞬間移動的な歩行をみせてくれた彼女に、少なからず信也は驚きを隠せない。

はつきり言つて、人間離れた力を目の当たりにして言葉を失っている状態だ。

「……あ、ああ。特に、問題はなかったよ」

そんな中で少し強引に、信也は言葉を発すると、彼女はほっと胸を撫で下ろした。

「そうですか。良かった」

「つて、こら！」

そう彼女がそう返事をすると同時に、どこからか持ってきたのか、少し薄めの本で美香はその頭を軽く叩いた。

「……あう。み、美香さん。何するんですか」

「何するもなにも、あんた。契約もなしに、勝手に力を使っちゃだめでしょう！……まあ、この子が心配だったのはわかるけど、せめて普通に近づきなさい」

おかげで信也君が驚いてるじゃない、と美香は志穂の頭に軽く当たった本を持ちあげつつそんなことを言う。

「……ご、ごめんなさい……」

と、柔らかく叩かれた頭に手を置き、志穂は気を落としながら謝る。そのあと、そろそろと信也の方を恐る恐るに上目遣いに見る。

おそらくは、信也が今の光景を目の当たりにして、どんな反応を示しているのか気になるのだろう。

「……あの、大丈夫ですか？」

「ああ。最初は驚いたけど、今はもう大丈夫だよ」
と聞かれ、信也はそう言葉を返す。

これでまた、新たな疑問が増えた。

遅かれ早かれ、今日にそれは解消されるであらう。少なくとも、今の彼が持つ疑問については。

そのあと、この部屋にいるメンバーで談笑した。その中で分かっ

たことは、信也たちがいるこの建物は、総業五十五年目を迎える旅館で、その名前を「紅葉旅館」。その三代目館長を務めるのが輝彦なのだという。

その数分後、ここで働く従業員が運んでくれた昼食を摂った。献立は、鮭の切り身に味噌汁と漬物。それと、白米とひじきの和え物である。

そしてそれが、想像していたより美味しかったのは言うまでもない。

昼食を食べ終わり、みんな一息吐いたところで、輝彦は徐に立ち上がった。

それと同時に、会話をしていた信也たちは自然と彼の方へ視線を向ける。

「さて。みんな、もう動いても問題ないな？」

と、にいつと笑みを作った輝彦はそう言いながら彼らを見渡す。

特に拒む理由はなかった信也たちは、一斉に首を縦に振り立ち上がる。

「それじゃあ、ついておいで。どのみち、本題に入るにしても、場所を変えんとあかんし」

そう言うなり彼は歩き出し、信也たちが入ってきたふすまを開けて進みだす。

信也たちも、輝彦においていかれないようにさっさとついていく。先導をきる輝彦が行く道は、信也が来た道とは逆の方向だった。しかも、奥に進むにつれて、宿泊客や従業員とのすれ違いがなくなっている。今ではこの廊下を歩く彼らの足音と時折床が軋む音くらいである。

やがて、信也たちの前に現れたのは、こげ茶色の両開きの扉であった。この扉だけは、襖とは違って洋風な扉だ。それに、扉の取手

部分には南京錠付の輪になった鎖がかけてある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3508v/>

守護者の誓いー漆黒の捕食者ー

2011年11月3日14時11分発行